

専門家インタビュー

批判するより考え方を示し 農業問題の本質に迫る

『日本のコメ問題』
『現代日本農業論考』 著者

一般財団法人 農政調査委員会 調査研究部 専門調査員

小川 真如



おがわ・まさゆき

● 1986年鳥根県生まれ。2009年に東京農工大学農学部を卒業、12年に同大学院農学府修士課程を修了。新聞記者を経て、早稲田大学大学院人間科学研究科にて学び、現在、農政調査委員会専門調査員、東京農工大学非常勤講師、恵泉女学園大学非常勤講師など。専門社会調査士、修士（農学）、博士（人間科学）。著書に『水田フル活用の統計データブック』『水稲の飼料利用の展開構造』がある。

と『現代日本農業論考』（春風社）を6月に刊行されましたが、どのような書籍でしょうか？

『現代日本農業論考』では農業全般の話を取っており、『日本のコメ問題』の内容を理論的に支えている土台の部分にあたります。一方、『日本のコメ問題』は読みやすくするために、理論的な話はあまり書いていません。

ですから、『日本のコメ問題』からみれば『現代日本農業論考』は舞台裏といったところですね。『現代日本農業論考』からみれば『日本のコメ問題』は、農業にかかわる広いテーマからコメ関係の内容を集中的に切り出して、読みやすく整えたものといえます。

——『日本のコメ問題』を早速読みましたが、日本の水田農政、コメ問題をわかりやすく解説されていますね。どのような読者層を想定されたのでしょうか？

普段、農業に馴染みのない方から、農業が専門の方まで、幅広く読んでいただきたいと思いながら執筆しました。『日本のコメ問題』はもともと出版社から、都市住民でも理解できるようなコメ問題の解説書を執筆してほしい、という依頼を頂いたのがきっかけでした。

そこから編集者との打ち合わせで、コメ農家や農業関係者の方々にも、読み応えのある内容にしようという話になったんです。長年、コメに携わってきた農家や関係者の方には、こうした時代もあったりとノスタルジーに浸ってもらったり、都市にお住まいの方には現在のコメ問題について理解を深めてもらったりされるような新書を目指しました。

日本のコメを説明しようとするとは必ず登場するような、「主食用米」「転作」「生産調整」という専門用語や、農業政策の名称、「生産」「消費」「供給」「需要」といった用語も、基本的に使っていないですし、コメにまつわる雑学ネタも随所で紹介しているので、誰でも気楽に読んでいただけたらと思いますよ。

——『日本のコメ問題』では、未解決の問題として「田んぼ余り」を強調されています。「田んぼ余り」とはどのようなことでしょうか？

コメが足りない時代にはいろいろな問題があったとはいえ、コメが足りている状態という幸せに向けて、迷いなくコメの増産に猛進できたわけです。ところが、コメが足りた後は、「コメ余り」という幸せな悩みを抱えることになりました。

今年、水田政策に、5年水張り、問題の激震が走った。水田転作のあり方を見直す政策転換に農業現場は動揺を隠せない。日本の総人口が増加から減少に転じ、需要の伸びないマーケットに向き合わせるを得なくなつたいま、我われは農業・農地・農政についてどう向き合ったらいいのか。絶対的な答えを示すより、「考えていくための考え方」を示したいと、2冊の著書を刊行された農業経済学者の小川真如さんに話を伺った。

「田んぼ余り」こそ

これから対峙すべき問題

——はじめに小川さんの研究活動について教えてくださいませんか？

農業経営体や行政、農業関連団体などへの調査で得たデータに基

（取材・まとめ／加藤祐子）

づいて、現在の農業を取り巻く構造や、農業政策の影響を分析しています。今後の農業政策に貢献する知見として発表するほか、今後のあるべき農業政策について提言を行なっています。

——『日本のコメ問題』（中公新書）

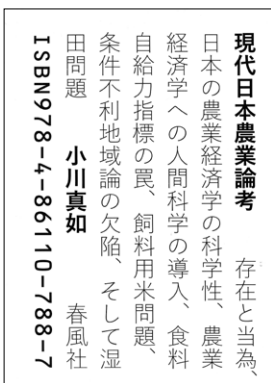
書籍情報



日本のコメ問題

5つの転換点と迫りくる最大の危機

中公新書 960円+税 320ページ



現代日本農業論考

存在と当為、日本の農業経済学の科学性、農業経済学への人間科学の導入、食料自給力指標の罫、飼料用米問題、条件不利地域論の欠陥、そして湿田問題

春風社 7,200円+税 570ページ

した。そして、コメ余りの悩みの多くは、生産調整、つまり田んぼを余らせることよって解決されてきました。そこで起きた最も重大な問題は、コメの自給達成により生まれることとなった余った田んぼから、豊かさを享受する方法が十分に確立されてこなかったという点です。果たして余った田んぼが社会の幸福に貢献するのか、それともいらぬものなのか……はつきりとどちらかという答えが出ておらず、対処の仕方に私たちは困っているわけです。

——農業関係者の多くは田んぼ余りという現実を認めたくないのが本音ではないでしょうか？

そうですね。そのなかで根強く残ってきた論理が、田んぼは余っていないという考え方です。使わない田んぼがあるにもかかわらず、田んぼは余っていない、というのは奇異に聞こえるかもしれませんが、ね。どうということかという、理

想的な田んぼの使い方をすれば、コメを毎年作らずに田畑輪換にした方が良いという考え方や、平時に使わない田んぼでも、有事となればコメを作るために必要という考え方などが登場してきたのです。

こうした、田んぼは余っていないという考え方は、転作補助金をはじめ、余った田んぼへの補助金を肯定する重要な論拠に使われてきました。一番わかりやすいのは、食料安全保障ですよ。コメの自給達成という幸せの副産物として生まれた田んぼ余りですが、食料安全保障などの観点から存在意義が認められてきたわけですから。

ところが、食料安全保障の前提にあるのは、田んぼは足りていないという考え方です。つまり、余った田んぼをどうするかという問題に正面から対峙することなく、現在に至っているわけです。

——余った田んぼが食料安全保障からみて必要だという考え方は、

田んぼが足りなかった時代の発想の延長線にあるわけですね。

そのとおりです。そして、それは現時点でもとても重要な発想だと思います。日本は食料自給率が低いですからね。

ただし、注意しなければならぬのは、人口減少によって食料安全保障からみて必要な農地が減っていくことです。そして、近い将来、食料安全保障上必要な農地は、日本の農地全体よりも少なくなる可能性があります。

食料安全保障からみて足りていないという論理は、田んぼのみならず農地全体で成り立たなくなる可能性があるわけです。近い将来、田んぼはもちろん、農地が余っているということに対峙することになるでしょう。これ以上はネタバレになつてしまふので(笑)……こうした将来予想に関心のある方は、『日本のコメ問題』の第7章をぜひ読んでみてください！

農業観・農地観を軸に議論の活性化を図りたい

——さて、一方の『現代日本農業論考』は分厚く難解そうな学術書ですね。帯の背表紙に「考えていくための考え方」と書かれています。まずその部分を解説していただけますか？

この本では、農業はどうあるべきかということについて決め付けずに、考え方が違う人同士が具体的な農業問題について、ともにより深く考えていくための方法を提案しています。

たとえば、「食料安全保障からみて日本農業は絶対大切だ」と主張するAさんと、「食料安全保障を強調するのは農林水産省のプロパガンダだ」と主張するBさんとは、上手くコミュニケーションをとれないことがあります。しかし、「人口減少によって、食料安全保障上必要な農地が、日本の農地全体よりも少なくなる可能性がある」ということをテーマにすれば、一緒に考えたり、余った農地の使い道と一緒に考えたりしていくことはできるかもしれません。

ほかにも農産物輸出で考えてみましょう。Aさんが「農産物輸出

を増やすべき」と主張し、Bさんもまた「農産物輸出を増やすべき」と主張している場合、AさんとBさんは同じ主張のように思えます。でも、もしかすると、Aさんは食料安全保障からみて余った農地で作った農産物を輸出しようと考えていて、Bさんは食料安全保障のために農産物を輸出し、いざとなれば禁輸すればよいと考えているかもしれません。すると、AさんとBさんの主張は、実は随分違うということになります。AさんとBさん、それぞれの農業観・農地観によって、農産物輸出の意味合いは全然違うわけです。

—— こういうシチュエーション、農業論議ではよくありますね。

はい。それにもかかわらず、こういった議論をする際に、農業関係者の場合、往々にして、「輸出農産物を増やすべき」といった次元で終わっていることが多いような気がします。たとえば、「有機農産物を増やそう」、「飼料用米はダメな作物だ」といった結論部分を決め付けた主張や、そうした主張を知識として得て、満足してしまうような状態です。

運動論的に仲間を増やすのであれば、目標設定をあいまいにする

メリットはあるでしょう。厳密には主張が違う者同士が一緒に声を挙げられずからね。しかし、それではいつまで経っても議論は深まりません。そうではなく、一段踏み込んで、具体的に有機農産物や飼料用米について国民それぞれが、ともにより深く考えていくことがよりよい日本農業の展望につながるのだと『現代日本農業論考』では提唱しています。

—— 農政問題はとかく戦後の減反政策や農協問題などへの批判に基づいて語られます。そうした論調に対して、小川さんはあまり厳しく批判されていないのはなぜでしょうか？

これも、結論部分を決め付けないうという考え方によるものです。政府批判や農協批判は、現在でも重要な指摘です。ここでいう批判とは、何かに反対することはもちろん、特定の主張が絶対正しいのだと決めつける考え方も含みます。

とりわけ、日本農業や農協が勢いをもっていた時代には、批判がよりよい農業に貢献していたと思います。しかしながら重要なのは、これまでの経緯や現状を批判したからといって、必ずしもよりよい

農業につながるわけではないという状況です。

批判が弾圧されていたような時代であれば、批判が社会をよりよくする大きな力になりました。ところが、現在はインターネットを通じて、いつでも誰でも批評して世界中に発信できる時代になりました。匿名であれば所属・職名を隠して情報を発信することもできます。こうした時代だからこそ、政府や農協を批判して悪者に仕立て上げて解決しないような、より本質的なコメ問題や農業問題に迫る研究活動を目指しています。

—— 言葉ではわかる気がしますが、ただ、それでは実際にどうすればよいのか、解決策はありますか？

現時点では二つの方法があると考えています。批判というのは、本人が批判する意思がなくても、個人の主張によって間接的に批判になっている場合があります。

そこで一つ目の方法として、個人の主張の源泉となるような「農業観・農地観」に注目しています。手始めに農家・非農家問わず、農業に肯定的・批判的にかかわらず、いろいろな方々の農業観・農地観をインタビュー形式で集めています。「現代の農業観・農地観

—— 農業の捉え方から、農業を捉える」(<https://nogyokan.com>)という調査企画です。加えて、政府などの農業観・農地観の分析にも関心があります。いずれも新たな農業の展望を描く上での重要なカギを握っていると思います。

また、二つ目の方法として、主張・批判して終わりではなく、個別の主張・批判を突き合わせる場が必要だと考えています。20年ほど前の映画に「事件は会議室で起きてるんじゃない！ 現場で起きてるんだ！」というセリフがありました。こここのところ、選ばれた少数人数の会議による決定が現場に多大な影響を及ぼすケースが増えているような気がします。むしろ、「事件は現場で起きてるんじゃない！ 会議室で起きてるんだ！」と言いたくなる状態です。

まずは、所属や肩書に関係なく、誰もが気軽に参加して主張を突き合わせられる場を設けること。場合によっては正式な会議室にその主張を提案できるような仕組みがあるとよいでしょう。会議室よりも現場を重視する気持ちも大切ですが、議論を通じて日本農業の活性化を図るといふアプローチにも力を入れていきたいと思っています。